

出会い——新米先生と三十三人の子どもと——

梅田 宣子

きょうはこの子がこんなことを言っていて私を笑わせてくれた。そうそう、あの子が仮面ライダーではない絵をかいたのも、きょうが初めてだった。などと言っているうちに、いつのまにやら一年がたってしまった。毎日の仕事はどうつめこんでも勤務時間内には終わりそうになかったし、行事が終わってやれやれと思っ
ている間に、もう、次の予定が迫ってくる。「ああ、忙しい、忙しい」とつぶやいているうちに過ぎ去ったこの十二月の、なんと早かったことか。

たった五年しか人間をやっていないのに、もうりっぱにその子らしさを備えている子どもを三十三人もあずかることになったから、さあ、たいへん。子どもだけではなく、その後ろには、母親
といたいへん気になる存在がそびえ立っていた。もっとも、母親との「つき合い」のむずかしさに気づいたのは、ちょっとたってからだっただけ。

子どもたちと初めて会った日のことをふりかえっていると、思

い出し笑いがうかんできてしまう。彼らは、まず、私の顔をまじまじと見つめた。そして曰く、「先生もみずぼう、そうなんだね」。思いがけない発言によって、「こんどきた先生」は初対面のあいさつもそこそこに、「みずぼう、そうのブツブツと、にきびあとのテンテンは違うもの」と教えることになってしまってしまった。
みんな、半年ぐらいはにきびの観察にこつていて、ふえたただの減っただの、はてまた、「ほくのみずぼう、そうはツルツルになったのに、先生のにきびはしつこいねえ」などと騒がしかった。
気ままな学生時代と、三十三人の子どもがよりかかっている、
そうそう自分勝手にはとびはねられなくなった日々との差は、大きかった。体がなかなか慣れず、そういえば、一学期はかぜばかりひいていた。

今でこそ、楽しい仕事です、と背筋をシャンと伸ばして言えるけれど、初めのうちは、「ああ、まだ降園まで二時間もあるなんて。それに、卒園までには十一月と五日。フウッ」といった

ありさまだった。のどの奥につばがちっともゆきわたらないような、ヒリヒリカサカサした感じとか、腰をまわすとギンギンッと骨がきしむかのような感覚などは、今でも忘れられない。

子どもたちと顔を合わせて以来、毎日毎日、失敗の連続だった。

全員を集めて、さあ、みんなでゲームをしようということになった時、一人の子がトイレに行きたいと言いだした。すると他の子もわれもわれもとつられて行ってしまい、ポットンととり残されたり。まったく、集合前に、一声かけなかったばかりに。また、シャベルの置き場所が知りたくて、「言つてちょうだい」と頼んだら、子どもは、「行つてあげよう」と考えて、部屋からころがり出て行ってしまったり。

マットの上をゴロゴロさせる時にも、ポケットの危険物（子どもものポケットって、ほんとうに、信じていたいものはいっている。石ころやバッタから、朝食のトマト、おやつビスケット等等）を出させることに気づかず、後で、とんだベチャンコ宝物がころがり出てきたり。

牽牛・織女のロマンスを語っている最中でも、「それ、おじいちゃんに聞いたよ。おじいちゃん、何でも知ってるんだ。でも、歯はないの。先生、先生、入れ歯、見たことある？」と話し出

す。それに、生活発表などでうっかり女の子を三人続けて指名しようものなら、「ちえつ、先生は女だから、女の味方なんだ」と男の子にヤジられる。こうした、瞬間的連想とかヤジとかいったものの、どれをとりあげ、どれを無視すべきかがつかめず、ずいぶん話がシリキレトンボになってしまった。今もってそうで、ついうっかりと子ども発言にひきずられては、失敗している。

教師としての経験も技術のもちあわせも乏しく、ずいぶんあせったけれど、結局、子どもにぶつかって、子どもの反応をみながら、ぎつくしゃつくと進むほかはなかった。泣いたり笑ったり、それすらおっくうなほど疲れはてたりした日々を思い返してみると、不器用ながら、思い出深い毎日だった。

「先生、生きるってね、育つてことなんだって」ある子がフツと口にしたこの一言、園庭のいちじょうの緑が目にかいころのことだったが、今だに耳の底で響いている。あの子にとっては、どこかで聞いてきたことを、そのまま言っただけだろうけれど。

ところで、子どもも私もこの日本で生きて以上、単に五歳児と新任教師が出会ったというだけでなく、当然、昭和四十八年という時代が保育にもあらわれているはずだ。

夏休み前のことだった。水や教材の使い方に、なんとしても無駄がめだった。たった五歳の子なんだからとも思っただけれど、ど

うやら不満げな言葉をもらっていたらしい。

「もう、先生ったら、すぐもつたいないっていうんだから。うちのおばあちゃんみたいだ」と言われてしまった。

それは、ついこの間まで私が昭和ヒトケタの母に向かって、言っていたことじゃないか……とニタリとしてしまったが、最近のこの物不足騒ぎ、日本中で「もつたいない」の声が響き出して、私もたいへんやりやすくなった。それにしても、この一年のうち、画用紙も折り紙も薄くなったこと。このような世の中、幼稚園もたいへん。

高層住宅の「上の方」に住んでいて、帰宅してドアをしめたら、もうその日は家の中でしか遊べない、という子も幾人かいた。そうでなくても東京のまん中のこと、外でとびはねられる子は少なく、そういうことも園での遊びに反映してきている。

私の学生時代は安保だ、学費値上げ反対だなどと、構内がたいへん騒がしかった。それに比べて、幼稚園は何と静かなことか。先生と子どもの親密な心のつながりに、ホッとするものを覚えずにはいられなかった。なにかにつけて、人の話を聞きましょう、と強調してきたのは、大学紛争の中で、言いたいことだけ言っただけで聞かないというタイプの人間を見すぎてしまったからかもしれない。

こうして一年間、「先生」と呼ばれ、指導する立場に押し上げられるはしたけれど、学ばせてもらったのは、実は私の方だったと思う。

たとえば、しゃべること。語いは私の方がはるかに豊かだけれど、五歳児の前で話すのは、なんと舌がもつれたことか。おとな同士だと、理解できていなくても、感動していなくても、むずかしい言葉を使うことによつてごまかせる。ところが平易な言葉の組み合わせとなると、そうはいかない。「しゃべること」の厳しさを思い知らされたこともたびたびだった。それから「ありがとう」を言える子になってほしいと考え、そのために私もそういう生活をしようと思いついたのだが、そうしてみると、一日に何度も何度もこの言葉を口にするようになった。今さらながら、私人だけの力で生きていくのではないと、考えさせられた。

夢ですごしてきた一年、一生懸命やっていたできないのならとか、こんなに人数が多くては、といったことに甘えてしまった面もあった。体の方はつらかったけれど、子どもに接することはいつも心楽しかった。

二度めの四月がやってくる。さて、これからの十二月にはどんな事件がまっているだろうか。

(大和郷幼稚園)